2017年1月18日八街キリスト教会・祈祷会メッセージ

聖書箇所：ミカ書4:1-5、7:18-20

**「ミカ：新しいエルサレム」**

　本日はミカ書から主の御言葉を頂きたい、と考えて居ます。ミカ書は所謂十二小預言書のなかで6つ目の預言書です。ユダ、エルサレムの滅亡を預言するとともに新しいエルサレムの回復の希望を述べた文書です。1:1に「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシェテ人ミカにあった主のことば」とあります。ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代と言いますと、BC750-687の60年くらいになりますが、内容から考えて、主にヒゼキヤ王の時代と考えられます。ヒゼキヤ王が父アハズ王と共同統治の時、北王国はアッシリアによって滅亡し、上層階級の人間は、ニネベ等の地に捕囚されました。南王国ユダはアッシリアに対抗したシリア・北王国連合の誘いを蹴って、アッシリアに従属しました。そのため、王国の滅びは免れましたが、アッシリアの属国化し、エルサレムを占領されたこともありました。ヒゼキヤ王はエジプトを頼りにしてアッシリアに反抗するよう政策転換をします。国内は「主なる神」への信仰を回復し、ヒゼキヤ改革を行いました。礼拝場所をエルサレムに集中することもこの時行われました。シロアムの池に繋がるギホンの水を引く灌漑工事なども行いました。アッシリアのサルゴンII世やセンナケリプの度重なる攻撃にも持ちこたえ、最後はアッシリア軍が恐るべき災害に直面し奇跡的に撤退するということもありました。そして、子供のマナセに王位を譲ることになります。しかし、このマナセは悪名高き王で結局その100年後ユダ王国はバビロニアに滅ぼされ滅亡することになります。ミカが予言した時期は北王国は滅亡し、南王国は存亡の危機にある時代です。彼の生涯も波瀾万丈でした。

　ミカという名前は“誰がヤハウェのようであろうか”という「ミカヤフー」という言葉が短くなったものです。実はミカ書の最後の方の7:18に「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか」という表現がありますが、この著者の名前の由来と掛けて表現していることは明らかです。ミカ書はこれ以外にもかけことばのような表現や、韻を踏んだ文章とかが多数あって、文学的にはかなり練られた文書である、といえます。

　ミカ書の全体構成は複雑です。1:1は別として、1:2から2章の終わりまでが一つの段落で3:1から5章の終わりまでがもう一つの段落です。6:1から最後までが第三段落です。この三つの段落の最初はすべて「聞け」の言葉が組み込まれています。「聞け」は「聞け、イスラエル」というユダヤ人の最も大切な祈りである「シェマー」の最初の言葉です。従ってミカ書はイスラエルに対し神の言葉を告げるのでこれを聞け、という意味の預言を意図していることがわかります。そしてこの３つの段落の中に、更にイスラエルに対する警告となるいくつかの預言があって最後はイスラエルの対する回復の希望で段落が終わる、という構成になっています。いわば警告的預言と回復の希望が3回繰り返される、という構造になっている、ということです。しかし、預言、希望の具体的内容は異なります。この繰り返しという事実が、それぞれの記述時期がづれている証左なのではないか、という意見もありますが、これも、異なる時期を想定した預言である、と解釈すれば十分説明可能です。

　では内容を概観しつつ、本日読んでいただいた2個所については、具体的にみていくことに致します。まず1:2から1:9までですが、ここでは「サマリヤの崩壊とミカの嘆き」が語られています。注意いただきたいのは「すべての国々の民よ、聞け」という言葉で始まっている点です。旧約聖書には主の民イスラエルを純粋に保つため異邦人に対し排斥的になる民族主義的流れと、主なる神は他の民族の神でもある唯一神であることからくる開放性を持った国際主義的流れとがありますが、ここでのべられているのは国際主義的の方です。ついで1:10から1章の最後までです。ここではユダ王国の町々をミカが嘆いています。最後の16節で「あなたの喜びとする子らのために、 あなたの頭をそれ」と記されています。「頭をそれ」というのは「悲しめ」ということです。頭全体をそれ、と言っています。「彼らが捕えられて」というのはユダ族の捕囚を指している、と言えます。すでにアッシリヤに依るイスラエルの捕囚があったので、それがユダにも及ぶと言っているのです。ヒゼキヤが必死にユダ王国の独立を守ろうとしている時の預言ですから残酷な言葉です。これは百数十年のちに現実となります。

　2:1から5節までです。ここでは有産階級の末路について預言しています。2節をご覧ください。「彼らは畑を欲しがって、これをかすめ、 家々をも取り上げる。 彼らは人とその持ち家を、 人とその相続地をゆすり取る」とあります。財産を持って居る人間が更に財産を得ようと不正なことを行っている、というのです。そして3節では主がこれらの強欲な人間には災いを下そう、と考えておられる、というのです。他の預言者もおしなべてそうですが特にミカは財産家に対する批判と貧しい者に組する態度は強烈です。2:7から11節まではこのような上層階級の人間に「たわごとをいうな」とどやしつけています。8節に「以前から、私の民は敵として立ち上がっている」とありますが、ミカは“財産などないわれわれ庶民は以前から、このような財産家の敵なのだ”と宣言しています。

　第二段落に入ります。3:1から4節までを見ましょう。ここでは神は支配者に答えられない、と言っています。公義を知っていながら善を憎み悪を愛している支配者たちには4節で「彼らが主に叫んでも、主は彼らに答えない」と言っています。強烈な反権力的姿勢です。「公義」というのは善を行い、社会正義を実現することですが、より具体的には多くの場合、特にミカ書においては“孤児ややもめのような貧しく弱い者の味方になる”ということを意味しています。神の恵みは貧しき者、弱き者の上に特に注がれ、そこに神の力が働く、ということです。そうでなければこの世の公平は実現されない、ということもできます。続いて3:5から8節では支配者批判に続けて預言者批判です。“預言者と言われている人々は自分に食物を与えてくれる人間には「平和があるように」などと御機嫌取りをいうが何もくれない者に対しては聖なる戦いをいどむ。幻を見ることもなく全く役に立たない。将来を予言する先見者といわれるような者や占い師たちもおなじことだ”というのです。考えてみると、この貧富の差は現代に於いてはもっと甚だしいことになっています。1%の人が世界の総資産の20%を所有しているという状況はどう考えても神様が公義に適った社会とはおっしゃってくれないでしょう。

　4:1から8節までは新しいエルサレムの描写です。イスラエルの回復の使信が5章の最後まで続きます。ここが、第二段落の希望に当たる部分です。1-5節は本日お読みいただいた箇所です。1節に「終わりの日に」とありますので、これは「終末の日」即ち「主の日」の出来事です。そして2節の冒頭で「多くの異邦の民が来て言う」とあります。先ほどの旧約における2つの流れから見ると開放的な国際主義的なイスラエル信仰の流れです。3節では「主は多くの国々の民を裁き」と言われていますので、このイスラエルの回復の時は「裁きの時」でもあるのです。実はこの1-3節とほぼ同じ表現がイザヤ書2:2-4に出てきます。このイザヤ書の剣を鋤に、槍をかまに打ち直し、というところは、ニューヨークの国連の建物の入り口に掲げられている言葉として有名です。国連は永久に戦争を廃棄するために作られたのです。高い理想の表現です。ミカ書のこの箇所とイザヤ書のこの箇所は極めて類似しています。どちらが先かについては長い論争がありますが決着はついていません。ミカとイザヤでは預言を開始した時期はイザヤのほうが若干早いとみられますが、この箇所についてはミカの方が先なのではないか、という考えに私は同意します。このことよりもっと重要なのはヨエル書との関係です。問題の箇所をお読みいたします。ヨエル書3:9-10です。「諸国の民の間で、こう叫べ。 聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。 すべての戦士たちを集めて上らせよ。/ あなたがたの鋤を剣に、 あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。 弱い者に「私は勇士だ」と言わせよ」とあります。ここは打ちひしがれたユダ民族に対し、主が勇気を与えるよう呼びかけている箇所です。戦のために鋤を剣に、かまを槍に、打ち直せ、と言っています。イザヤ書、ミカ書と逆です。ヨエル書の方が古い表現である、ということはほぼ間違いないところですから、ミカは古くからある戦の備えであるヨエル書の表現を逆にして、主の日には戦争がもうない日がおとづれる、という事を言っているのです。戦争をなくすには剣と槍、即ち軍隊をなくせ、と言っています。4節から8節までに戦なき世界におけるイスラエルの回復が語られます。6-8節で捕囚に残された者、即ち「残りの者」が足萎えが強くされるように、イスラエルは強い国民にされる、と言われています。

9節から5:1までは、回復された主の民イスラエルのことが「シオンの娘」として語られます。2節はイエス・キリストの誕生を預言した節として有名です。お読みします。「ベツレヘム・エフラテよ。 あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、 あなたのうちから、わたしのために、 イスラエルの支配者になる者が出る。 その出ることは、昔から、 永遠の昔からの定めである」。エフラテはベツレヘムの古い呼び方です。ベツレヘムは士師の時代の祭司ミカの弟子となったレビ人の出身地です。またダビデの出身地でもあります。現在、ベツレヘムはパレスチナ自治政府の支配地に入っており、イスラエル国家からみれば敵の町です。イスラムの民の貧しさが伝わってくる町です。このミカ書の文脈の中では、ユダ族を救う者がこの地から出ることがはっきりしているが、その子が生まれた後、諸国の民がイスラエルに従うようになる、と言っています。7節から5章の最後までは「ヤコブの残りの者」について神様が「青草に降り注ぐ夕立のよう」にすると言っています。最後に15節で「わたしは怒りと憤りをもって、 わたしに聞き従わなかった国々に復讐する」と言われます。主なる神が復讐をするのであって回復されたイスラエルが復讐をするのではありません。

6章から最後の段落に入ります。三度目の「聞け」が出てきます。8節までが「主の訴え」と称せられ、なんと「主なる神」がその民に対し、訴えを起こしています。8節では主の民とはどうあるべきかについて述べています。「ただ公義を行い、誠実を愛し、 へりくだって あなたの神とともに歩むことではないか」と言われています。「公義」、「誠実」、「謙遜」の３つが「神と共に歩む」ことの内容である、と言われています。「公義」とは神の目から見ての公平、即ち貧しい者、弱い者と共にあることです。「誠実」というのは旧約聖書でしばしば出てくるヘセドという言葉です。「慈愛」、「憐み」、「誠実」、「忠誠」というような多様な意味をもった言葉です。ここでは神様に対する忠誠、誠実のことであろうと思われます。「謙遜」は神様に対する謙遜であり、それは即ち神に似せられて想像された人間、他者に対する謙遜さです。創世記には「神と共に歩んだ」とされるエノク、ノアが出てきますが、「公義」、「誠実」、「謙遜」をそなえた人物として伝えられてきたのだと考えられます。また「神と共にある」というのはこのような生き方であり、新約の我々の時代にあっても同様です。9節から8章の終わりまではこのような「主と共に歩む」態度ではない、エルサレムの犯行をあげ、最後に「あなたがたは、国々の民のそしりを負わなければならない」と結んでいます。6:9に2度「聞け」という言葉が出てきます。国々の民のそしりをイスラエルが負わねばならない、と言っているのです。ここで思い出すことがあります。それはユダヤ教の一つの派がナチス・ドイツによるホロコーストをイスラエルの民が他国のそしりを受けた証である、と解釈している、というのです。神の怒りをイスラエルが受けた、というのです。このグループはイザヤ書の救い主というのはイスラエル民族そのものであり、このイスラエルの犠牲によって人類に主の赦しが与えられる、と言うのです。要するに主イエス・キリストがなされた業はイスラエル民族の運命である、と言う訳です。これをどう考えるかは別にしても、イスラエルの信仰の広がり、と深さを見る思いです。

7章に入ります。1-7節まではイスラエルの地が腐敗と混乱にあることが描写されます。2節には「人の間に、正しい者はひとりもいない」とあります。この言葉はローマ書3:10の「義人はいない。ひとりもいない」にそっくりの表現です。ミカ書のこの言葉はローマ書の「義人」とはヘブル語、ギリシャ語とも異なる言葉ですが、その意味するところは同じく「人の間」即ち人間には「正しい者はひとりもいない」ということです。3節では裁判官のわいろが語られています。善人、正しい者には茨の道である、と言われています。6節では親子の関係もめちゃくちゃだと言われています。

しかし、7節で「私は主を仰ぎ見、 私の救いの神を待ち望む。 私の神は私の願いを聞いてくださる」と言って希望を見ています。8節から7章の最後まではイスラエルの救いの希望を語り最後にミカの讃美の祈りで締めくくられます。10節で「あなたの神、主は、どこにいるか」と言う者どもはこの最後の主の日に「恥に包まれる」と言います。12節では「エジプトから大川まで、---人々はあまたのところに来る」と言われています。大川といえばユーフラテス川です。要するに、世界中の人々が回復されたイスラエル、エルサレムに集まってくる、と言っています。14節では「あなたの民」が「バシャンとギルアデで草をはむようにしてください」と言っています。この地はヨルダン川の東にあり、当時は水が豊富な地で有名だったようです。エデンの園のような描写です。16-17節では異邦の民についてののろいのようなことを言い、結局主に従う者になる、と言っています。最後は本日読んでいただいた恵みの言葉です。解説的なことは不要だと思います。もう一度お読みいたします。「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。 あなたは、咎を赦し、 ご自分のものである残りの者のために、 そむきの罪を見過ごされ、 怒りをいつまでも持ち続けず、 いつくしみを喜ばれるからです。/もう一度、私たちをあわれみ、 私たちの咎を踏みつけて、 すべての罪を海の深みに投げ入れてください。/昔、私たちの先祖に誓われたように、 真実をヤコブに、 いつくしみをアブラハムに与えてください」となっています。それでも私たちの神、そして主イエス・キリストを想起しながら若干見てみます。18節で「咎を赦し、---そむきの罪を見過ごされる」といっています。罪を消し去るのではありません。主の十字架の故に罪を見過ごし、罪なき者とする、と言われているのです。また「怒りをいつまでも持ち続けず、慈しみを喜ばれる」と言われています。この「いつくしみ」はあの「hesed」です。最後の祈りの言葉は「真実をヤコブに、慈しみをアブラハムに与えてください」です。真実は真理という意味の「emet」であり、慈しみはヘセドです。“神のまことをヤコブのすえ、新しいイスラエルに、神の慈しみをアブラハムのすえ、すべての民にお与えください”と言い換えることができると思います。神の国の到来の希望を祈り求めているのです。

　ミカ書を最初から最後まで見てみましたが圧巻はなんといっても4:3の「その剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」という平和の使信です。これはイエス様の「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます」に通じています。聖書の言葉に忠実に考えると戦争はキリスト者が為すべきこととは考えられません。イスラエルの信仰の行き着くところは戦争の放棄であり軍隊の廃止です。キリスト教の歴史においてもこのことを否定する屁理屈が多数考えられてきました。「その理想は掲げるにしても、この罪の現実の世界では、力のバランスによる相対的平和を求めざるを得ない」と言う理屈はその代表的なものです。こんなのキリスト者がいう事ではありません。わたしもいろんな限定的戦争を許容する理屈を考えてみました。また、正当化する聖書の御言葉も見てみました。しかし、それらはすべて、この世の罪の正当化であり、まやかしの屁理屈である、という結論にならざるを得ませんでした。いかなる戦争の正当化もキリスト者の心の中に「後ろ暗さ」を残します。キリスト者は神の国に国籍を持つ者として、あくまでも「神の国」建設の御業を証するものです。最後の破滅的戦争があって、主の再臨によって戦争なき社会がはじめて訪れるのかもしれません。キリスト者はそれがいつどのように訪れるのかはわかりませんがイスラエルの信仰の行き着いた地点における主イエス・キリストの御言葉に忠実に生きるべきです。「いかなる理由があっても戦争はしない。軍隊はもたない」というのが証です。非現実的と言われたってかまうことはありません。御心に添うものには主が報いてくださいます。報復は主のなされることです。祈ります。

（神様、今日のひと時を感謝いたします。2700年前、ミカが軍事力を放棄せよ、と力強く呼びかけたにも拘わらず、未だ戦争の絶えない人間の罪をおゆるしください。主の再臨による永遠の平和の到来を希うものですが、「神の国」の証人として、平和の主を戴く者として我々をたたしめてくださいますよう願います。我らの救い主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）